多文化をささえる人びと

外国人の「居場所」をつくる

財団法人 とよなか国際交流協会

豊中市の外郭団体として一九九三年に設立されて以来、外国人コミュニティが安心して集える「場づくり」を行なう「財団法人とよなか国際交流協会」。外国にルーツのある人たちの「居場所・拠り所」を用意するとともに、エンパワーメントを目指すさまざまな事業を展開する

野中（のなか）モニカ
FM COCOLO DJ、京都外国語大学・天理大学・甲南女子大学非常勤講師
専門は在日ブラジル人研究（言語・教育・アイデンティティ、ポルトガル語教育。近年は、継承語としてのポルトガル語教育・教材開発に関心をもっている。共著に『ポルトガル語の会話エッセンス』（二〇〇七年）がある。

阪急宝塚線の豊中駅から徒歩約一〇分、国道一七六号線沿いから若干奥まった閑静な住宅街に位置する三階の建物「とよなか国際交流センター」の二階に、財団法人とよなか国際交流協会は事務所を構えている。

外国人ママと子どもたちの心地よい空間

私は一〇年ほど前からここの活動に関心をいだき、定期的に訪れているが、ここに向かうたびに我が家への帰路に着くような感覚をいだく。同じように感じる人も多いようで、建物の入口付近の「センターはわたしにとって……」という寄せ書きポスターにはさまざまなことばで、「僕の生活の一部分です」、「私の家のようなところです」など、ここに集う外国人や日本人の率直な気持ちが綴られている。

二階のオープン・カウンター式の協会事務所に面した交流スペースにはさまざまなグループが集う。アットホームな雰囲気のなかで日本語を学んだり、世間話に花を咲かせたりする外国人の姿が目に留まる。とくに生き生きとしているのが外国人ママとその子どもたちで、ここに集まる彼らにとって心地よい空間となっているようすが感じられる。

協会事務所は国際交流センターの２階部分

外国人や日本人の想いを込めた寄せ書き

協会が展開する三大事業である「相談サービス」、「日本語」、「子ども」を対象に実施されている。市の財政悪化や協会予算の逼迫等といった近年の状況から事業のターゲットを絞り込んだ結果ではあるが、異国の地でもっともストレスにさらされ、弱い立場に置かれている両者に焦点を当てている点にとくに注目している。

外国人女性にとっては、オアシスのような存在

協会が実施する事業に外国人の声が取り上げられるようになったのは、一九九八年の多言語スタッフによる相談サービスの開始からである。外国人に寄り添う方向へと協会がシフトしたのは、多言語スタッフの存在が大きい。スタッフたちは単なる通訳ではなく、同郷の、とくに女性たちの相談に乗り、寄り添い、その声を協会にフィードバックしてきた。

結果として、母子保健事業、外国人ママ・親子の交流事業、幼い子ども連れの母親でも積極的に参加できる保育付き日本語事業など、需要に即したさまざまな事業が生まれ、発展してきたのである。

保育付きの日本語クラスは、日本語を学ぶ場だけでなく、異国での出産や子育てからくるさまざまなストレスを共有する女性たちにとって、息抜きと交流ができる憩いの場にもなっている。社会のなかで居場所を確立できない外国人女性にとって、オアシスのような存在といえるかもしれない。

相談事業もまた、当初の四言語から九言語対応になり、生活相談だけでなく、家庭内暴力（DV）の相談の増加に伴ってDV専用ホットラインを設けるなどして、充実してきた。とくにDV相談では、支援する機関が全国的にも少ないことから、「DVの相談ならとよなかへ」と言われるまでになったことは大きい。

母語・母文化継承をサポートする「子ども母語」活動

協会に通う子どもたちは、来日した子どもだけでなく、日本生まれ、日本育ちの外国籍やダブルの子どもなども増え、大きく多様化している。

私が協会の活動でもっとも注目している「子どもサポート」事業の対象は、そういう子どもたちである。ことばや文化が家庭から失われることを危惧する保護者の呼びかけで、母語・母文化継承をサポートする「子ども母語」活動が開始され、現在はポルトガル語・スペイン語・中国語のクラスが展開されている。

言語学習がメインではなく、子どもたちがそこで母語・母文化に触れ、自分のルーツを肯定して価値を見出し、仲間と寄り添える場所を提供する活動になっている。また、日本語学習が負担になっている子どもたちをサポートする「サンプレイス」は、大学生・大学院生のボランティアが日本語と学習を支援し、両者が寄り添って成長できる場を提供している。

母語・学習支援事業は一般に多数あるが、ここのサポート事業のユニークな点は、子どもたちと同じルーツをもち、同じ経験をし、年齢も近い「ピアサポーター」が、同じ目線で寄り添いながら活動を引っ張っていることだ。

「子ども母語」のスペイン語担当は大学院生、中国語担当は大学生、アシスタントたちは高校生、また「サンプレイス」でも中国などにルーツがある大学生たちが「ピアサポーター」を務め、子どもたちのロールモデルになっている。ここの活動で成長した子どもたちが将来、新たな子どもたちのロールモデルになる姿が目に浮かぶようである。

交流スペースで日本語を学ぶ外国人とボランティア

「子ども母語」活動の子どもたちとボランティア

直面する課題と期待、そして協会の今後

外国人のエンパワーメントを目指し、積極的に事業を展開してきた協会だが、現在大きな課題に直面している。来年、活動拠点が豊中駅に隣接する商業施設内に移転するのだ。アクセスが便利になり、より多くの人が集えるようにはなるが、親しんできた施設の移転の反対運動が稔らなかったことで、「当事者である自分たちの声が無視された」と落胆する外国人コミュニティがある。

さらに、移転の一年後には、現在のとよなか国際交流センター指定管理者である協会の当初の管理期間が終了する。継続できなければさまざまな事業の存続が危ぶまれる。

外国人市民の居場所づくりを長年かけて行なってきた協会だが、今後とも地域の外国人にとっての「拠り所」であり続けることができるのだろうか。地域住民として、外国出身者として、女性として、協会の今後に期待し、注目していきたいと思う。

相談を受け持つポルトガル語、ベトナム語、スペイン語の多言語スタッフたち